

Inabeな人々

GCI 連動企画

いなべで自らの暮らしを
生み出す人々を
紹介します。



川崎亮太・麻里夫婦 (HATAKEYA)



2018年3月、市外から移住し「HATAKEYA」を開業した川崎亮太・麻里夫婦。就農3年目の現在、大安町で年間20品目ほどの露地野菜を栽培している。

理想とする農業ができる場所

はじめは、家や畑を探すのに一苦労。市内を訪問して回る中で、少しずつ地元の人と話す機会が得られ、地域との関係づくりに繋がったそう。 「穏やかで親切な人ばかり、周りには自然もいっぱい、いなべは住みやすいまちです。職業柄なのか、地域の方とは年齢が離れていても、自然がもつと身近だったころの昔話で盛り上がるし、同世代にも面白い取り組みをしている方がたくさんいてとても刺激をもらっています」

自然を軸にした農業

化学農薬・肥料は使わないが、有機農業という概念にこだわらず、また、農法に関係なく何十軒と農家や法人を訪問し学んできた。そんな2人の農業は「自然」を軸としており、「自分たちの感覚を研ぎ澄ましながらも、科学的根拠に基づいた農業を行なっていきたい」と話す。

信頼されるクオリティの野菜づくりを追求するも、なるべく自然に負荷の少ない農業や暮らしを実践していきたいという。収穫された野菜は、員弁町の農産物直売所「ふれあいの駅 ურიბოუ」をはじめ、県外にも出荷しているそう。

農家だからこそのやること

2人ともに、大学卒業後に青年海外協力隊として2年間アフリカに住んだ経験が人生の大きな転機となっている。「アフリカでは人々の暮らしは自然の中であり、生活は畑仕事や食を中心に戻っていました。誰もが食糧生産に携わり、環境問題に直面していて、ほんの60年前は日本も同じでした」と話す。

「環境にやさしい」「自然を大切に」というフレーズをよく耳にするが、自然に対する理解や具体的なアクションという視点が欠けていると感じている2人。「毎日自然と向き合う農家だからこそ、野菜を作っていること以外に、何か発信できることがあるのでは!」といきいきと語る2人は、きつといなべの新しい農業を切り開いていくことだろう。



1.2.3. 約1.5ヘクタールある畑に広がる野菜 4. 風土・環境を活かして栽培した上質なサトイモは、三つ星の京都の料亭で使われている 5.6. 味が良く彩りも美しい野菜 7. 毎日、穫れたての野菜を丁寧に選別し、袋に詰める



生活情報
[まいめる]



携帯用
[モバイルサイト]

救急医療情報

- 三重県救急医療情報センター ☎ 059-229-1199
- いなべ医師会(在宅当番医) 📄 <http://inabe-med.or.jp/>
- 医療ネットみえ 📄 <http://www.qq.pref.mie.lg.jp/>

人口情報(令和2年8月1日現在)

総人口: 45,544 (-32)
世帯: 18,714 (-16)
男: 23,335 (-26) 女: 22,209 (-6)

